

わが山河巡礼

水上勉

わが山河巡礼

水上勉

中央公論社

わが山河巡礼

換印発止
©一九七一

定価 六八〇円

昭和四十六年六月二十五日印刷
昭和四十六年七月五日発行

著者 水上 勉

発行者 山越 豊

印刷 三陽 社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ一

電話(五六一)五九二一

振替東京三四

わが山河巡礼

*

目次

長府のひと

7

与謝の細道

47

丹波周山

61

信濃の善光寺

75

密の里 柚子の里

89

下北風間浦

103

青井の文殊峯

131

美濃のおいずる

147

虚竹の笛

175

気比の松原

201

三井の夕鐘

215

あとがき

240

装幀・カット
渡辺
淳

わが山河巡礼

長府のひと



私はいま長府にきている。下関市でも東の端へ、突然やってきた。この町に、これまで心をとめねばならぬようなこともなかったのだ、下関にはきて、ついぞくることはなかった。三度ほど、宇部へきた。山口へも萩へも行った。小倉から関門トンネルを車で、宇部へはここを素通りした。その時も、ああ、ここが長府だ、と国道を見て通ったが、ありふれた国道は交通量も激しく、倉庫や会社の建物も多いし、町は騒々しい感じで、車を止める気はしなかった。ところが、今度きて、はじめて町を深く見た。古い佳い町だった。びっくりしている。

山を近くにひかえ、細長く東西にのび、高みへいくつも小路がひろがってゆく。城下町の面影は、いたるところにあって、せまい道は舗装もゆきとどき、溝も浅く流れて清潔だ。それに何といても、土塀のある昔の家がよい。萩や篠山の町に似たところもある。いやそれより、坂が多いので、古雅な感じは、またべつの風格に思えた。赤つちの塀はこぼれ、門も、古い木肌は、みな風露の味である。柱も扉も虫食いで、覗けてみえる低い塀のなかに、黒くくすんだ石見瓦の平

家がある。二階家はあっても、低い軒だし、植込みの多いのがとてもいい。ちょうど夾竹桃のさかりだった。あるところにはグミの実が朱くうれて、あじさいも、塀の屋根に紫色の花を重そうにもたせかけていた。

汽車で小郡に降り、そこから車で湯田に一泊、しずかな山口市内も散歩して、ここへ廻った。螢のいっぱい飛んでいた瑠璃光寺の夜景や、古風な寺院の塀のところに草がはえていた風景など山口ならではの趣きだったと思うが、長府へきて、また格別の情趣がわいている。

乃木神社は、明治の將軍を祠るのだから、森のふかみも、石段のたたずまいも、まだ新しくて、苔むした感じはない。が、社のある高台から八方にのびる小路小路の、土塀のよさはいいのだった。いまにも、大小をさした武士がやってくる気がした。

私はこの古い町を過ぎて、いま、北の方へ登ろうとしている。そこに、私のことを思いつめて、五十年も生きてきた一人の老女がいる。その人に会うために、私はやってきた。山の谷は四王司と呼ぶ。印内町から長者町を経て、谷下へくると川が流れ、そこから、その谷のひろがる一本道だった。私は、もちろんはじめてゆくのだ。老女に会うのものはじめてである。顔はまだ見たことがない。

不思議なこともあるものだ。すいぶん前から、私は、もう一人の私に悩まされてきた。「もう一人の私」というと変だが、「水上勉」というもう一人の男が、この日本に生きて、四国、九州、

中国一帯に住み、本人からは音信はないが、その知人なり、友人から、私宛に届く手紙で閉口してきた。その男のことについては、またあとで書くとして、長府のこの山奥の村に住む老女から、意外なことを打ちあけられたのが、今日の訪問の動機だった。

一年前の冬の一日、東京の自宅に配達されてきた一通の未知の人からの手紙だった。こんなことが書かれていた。

「一面識もない一人の老女でございます。ごめいわくとは思いますが、私の一生をかけて、貴男さまに聞いていただきたいのです。貴男さまが、もしこの手紙を見て、笑いとばされても決して悲しみはしません。私は明治三十三年生まれで、早や七十歳に手のとどく年になっています。老先みじかいこと故、一生の秘密として、いままですごしてきた、この悩みを一度貴男さまに打ち明けて、笑って聞いていただだけで結構なのです。どうぞお願いします。私は山口県のある山村に生まれ、田は三町余りあり、畑もありの、村で二、三にかぞえられる楽な農家の四女に生まれました。下に弟が一人居り、今では弟の子が家を守り立派にやってくれています。私は幼くして、学校にも通い、裁縫もならい、有難く思っています。実母は六歳の時に死に、父が後妻をもらいましたので、いろいろのことがあって、十三歳の時に、遠縁にあたる家に養女にやられました。その家は紙すきもする家でしたが、そこで十八歳になりました。ところが、甥にあたる人と

の結婚の話がもちあがり、私はまだ早いので逃げて帰りました。実家は後妻がいますのでおもしろくありません。そこで実母の兄にあたる人が、門司の大里にいましたので、そこを頼ってゆき、置いていただき、叔父のすすめで工場へつとめました。田舎者なので、町の暮しは苦勞でした。工場には叔父もつとめていました。八月のある晩のことです。叔父も叔母もない留守を、私ひとり裁縫をしていますと、戸をたたき音がしました。夕食はひとりですませていました。玄關の音をきいて、戸をあけにゆきました。工場の職長さんが、手に折詰とお酒の瓶を下げて、立っていました。今晚は叔父叔母は留守だし、すまないがまたにしてくださいました。私もほんとに困りました。けれども、職長さんは、せっかくなのだから、もってきたものをここで食べさせてくれ、すぐ帰るからといわれます。私もしかたなく、座敷へ通しました。ときどき来る人でし、たし、むげにことわるのも叔父叔母に悪いと思ったのです。職長さんは一人で吞んで食べておられ、いろいろ世間話をしました。やさしい人柄で、私より年は十五歳くらい多かったと思います。そのうち、私に少し吞めといわれます。私は酒など口にしたことはありません。つい二、三杯吞まされるうちに、胸がくるしくなりました。ふらふらになって、そのまま、前後不覚になって、寝てしまいました。目がさめたのは夜なかの三時でした。水がほしくなつて、頭がしっかりしてから思い直してみますと、昨晚のことが浮かび、職長さんはもう帰られ、自分はどうしたのだろ、うか、と思つて、トイレに立つて、はじめて気づいてびっくりしました。泣き泣きその夜をすこ

しました。死にたいような気持です。明るくなると叔父叔母が帰ってきました。私は、昨晚のことを残らず話しました。叔父も叔母も困りました。もしものがあつたら、里にもうしわけがない。世間体がわるい。けれども、自分たちも世話になっている人のしたことから、がまんして、ゆるしてあげてくれ、といわれます。私はしかたなく、心の傷のなおるのを待つことにしました。ところが、たった一度のことなのに、妊娠してしまいました。月のものがとまったのです。叔父叔母もあわてました。いまなら、職長さんの家へとなりこんでゆけたかもしれませんが、その頃は、四十九年も前です。はずかしいというだけで、毎日泣いていたのです。私は恨みました。叔父叔母に頼んで、職長さんにかかけあってもらうようにしましたが、話はうまくゆきません。すると、叔父の友だちの人で、私が身二つになるまであずかってやろうと、ひきとってくださいる人がいました。世間の眼にもさらさず、内々に子を生むようにしてあげよう、家において好きな裁縫をしたり、編物をしておればよい、といわれました。私はその人の家へいって、分娩の日を待ちました。三月の八日に、無事男の子が生まれました。さっそく先方から、(タライ渡し)で受け取りにこられました。私には先方の人にあわせず、受け取りにこられたのです。子どもの顔も、ろくに顔にとどめないで、つれてゆかれたのでした。いま思うと、はかないことでございました。貴男さまによんでいたきたいのは、その子のことです。父親の名は水上聖次という人で、そして、三日目に、赤ちゃんの名を勉とつけたと奥さんからいってこられました。私は日がたつにつ

れ、体の調子もよくなって、お世話になった家から、夜のうちに、叔父の家に帰りました。乳がはって、毎日しぼりすては泣き暮しました。そのあいだ、里の親にも一度も会っていません。世間体を考えて、どんなに怒られるかと恐しく、会う気もしません。父の名水上聖次、子の名水上勉、四十九歳、今日になっても、忘れることはできないのです。

四十九年間、私は、あの一夜でできた子とその父親のことを忘れずにきました。私はその後、二年のちに、いまの主人と見合の話があり、仲人は鉄道の講習所の先生でした。世の中には、悲しい暗い運命をもった人はたくさんいる、まだあなたは若いのだから、過去にこだわらず、氣をもちなおして結婚せよ、とご夫婦にこんこんとさとされ、叔父叔母からもすすめられて、やっとその氣になりました。けれどその時、結婚に一つの条件をつけられました。一生、水上聖次の名を口に出さないこと、子どもの名も口に出さないこと。夫はいい人でした。やさしくて、私の過去のあやまちも許してくれています。この人とのあいだに、男二人、女二人の子がめぐまれ、私は、この子らを育てて幸福でした。ところが、いまから十年ほど前に、何かの本で小説を書く「水上勉」という人の名をみました。びっくりして胸がどきどきし、人ちがいたろうと思いましたが、本をみる度に、貴男さまのことが頭にやどるようになりました。私は、貴男さまの出なさるテレビもみました。貴男さまは、あの聖次さんそっくりでした。私は、ああ、やつぱりそうだ、自分の生んだ子が、小説を書く人間になってくれた、と思うようになりました。『湖の琴』『五番